

亀乗りの物売り

昔、ある所に亀と仲良しな行商人がいました。
少しお金にうるさい行商人は、行く先々でその手腕を発揮するの
でした。

第一章 マーケット

屋台の並ぶマーケット。そこをゆっくりと進む少年が居た。少年は大きな亀に乗り、きよろきよろと周りを見渡しながら難しい顔をする。

「ねえ、コウ。」

おやっさんが確保したって言う売り場、この辺だったよね？」

少年の言葉に答えたのは、彼の乗っている亀。

「うんとね、ボクに訊かれてもわからないから、ちょっとカイルロッドが地図見てくれる？」

「あいよ」

亀が喋った事に気がついた買い物客や屋台の店員が、驚いたような視線をカイルロッドの乗っている亀、コウに向けるが、彼らはそのような事には慣れていないように特に気にしていない。

ゆっくりとマーケットを進みながらカイルロッドが地図を見て、周囲を見渡していると、ぽっかりと屋台が置かれていない場所を見つけた。

「あ、コウ、そこだそこ。」

「やっど荷物下ろせるね、ご苦労様」

「いいのいいの。」

カイルロッドの役に立つなら、どんな荷物だってへっちゃらだよ」

空いている場所に辿り着いたカイルロッドは、早速コウから降りて、載せていた荷物も下ろす。

それから、荷物の中から組み立て式の台を出して組み立てる。

組み立てた台の上に並べられたのは、色取り取りの石が付いたシルバー製の装飾具だ。

この街のマーケットは、食料品だけで無く衣料品や雑貨、それにこう言った装飾品も屋台に並べられているのだ。

カイルロッドが売る装飾品は、そんなに上等な物では無い。

シルバー製とは言え、シルバーの純度もそんなに高い訳でも無く、付いている石も宝石と言えるような物では無い。

ただ、一般庶民がお洒落やお守りとして身につけるのには十分な物だった。

こうやって販売するシルバー製のアクセサリーを仕入れるのもカイルロッドの仕事なのだが、彼は基本的に新品は仕入れない。基本的に中古品だ。

新品を職人から買うとなると仕入れの時に値切る事が難しいのだが、中古品なら交渉相手は商売人、遠慮無く値切れるのだ。

値段交渉の事も理由としては有るが、他にも中古品を仕入れる理由は有る。

職人は自分が作る物の素材を良く理解しているが、中古品を売る商売人は素材の事がよく解っていないかったりする。その隙を突き、カイルロッドが持てる知識を総動員して言いくるめ、値下げをさせるのだ。

そんな感じで、中古品を適正価格よりも安く仕入れ、こうやって旅を続けた先の街のマーケットで、値段を上乗せして売っている。

台の上に売り物を並べても、カイルロッドは折りたたみ式の椅子に座ったまま、客の呼び込みはあまりしない。

興味のない人に無理矢理眺めさせても評判が悪くなるだけだし、興味のある人は勝手に見ていくから。

小さな木の板に細々と書かれていた飾具の値段は、あらかじめこの街で流通している硬貨の純度を見極めた上で設定されている。

今回は、純度が低いとは言えシルバーで石の付いた指輪が銀貨一枚か二枚、物によっては銅貨で買える値段設定だが、それはこの街の銀貨や銅貨の純度が高い事を考慮しての事だ。

純度の高い硬貨は、他の街で使う時に有利になる。

純度の高い金属は、どんな形であれそれだけで価値のある物なのだ。「あら坊や、あなたみたいなのがこんなシルバーのアクセサリーを売ってるなんて。」

信用して良いの？」

店番をしているうちに、裕福そうな婦人がからかっているような、それでいて興味深そうな様子で話しかけてきた。

その婦人に、カイルロッドは臆する事無く言葉を返す。

「そうですね、正直言うと、シルバーの純度という点では信用ならないかもしれません。」

この価格ですし、純度は落ちます。

しかし、丁寧に作られている物ですし、付いている石も高価では無い物の綺麗な物ばかりです。

ご婦人がお戯れに身を飾るのには手軽な物だと思えますよ」

その言葉に、婦人はじっくりと品物を見始める。

「まだ若いのに、こう言う物の価値がちゃんと解ってのね、偉いわ。」

実は私、こう言った装飾具に関して少しうるさいのよ。

あなたがでたらめな事を言ったら、お友達に信用ならない小僧が居る

とか話しちゃってたかもしれないけど、あなたは信用出来る子みたいね。正直な子は好きよ」

そう笑った婦人は、台の上に乗せられている装飾具の中で、一番高価な物を手に取り財布を取り出す。

銀貨数枚をカイルロッドに渡し、こう訊ねてきた。

「あなた、普段このマーケットで見ない顔だけど、旅の商人か何か？」
「そうなんです。この街に暫く居て、そのうちまた他の街に移動しますよ」

「あら、良いお店は何時までも居て欲しいけどねえ」

「旅をしながら仕入れもしてるんで、定住は出来ないですよね。」

あ、でも、この街には十日程居るつもりなので、良かったらその間に婦人のお友達も連れてきてくださいよ」

お金のやりとりの後も少し和気藹々と話し、婦人は今度はお友達も連れてくるわ。と言って去って行った。

それから日が暮れて。

カイルロッドは彼の所属する小さな旅商人のグループが取った宿の、厩にいた。

高級な宿という訳でも無く、ごく普通の宿。

他のメンバーは宿の部屋でゆっくり休むのだが、何処の街のどんな宿でも、カイルロッドは既に睡眠を取るのだ。

何故厭なのかというと、理由は一つ。

「ねえ、カイルロッドも偶にはふかふかのおふとんで寝て良いんだよ」
「ん……」

僕はふかふかの布団より、コウと一緒にの方が良い」

宿の部屋に入りきらないコウと一緒に居られるように、既にいるのだ。

野営の時にも使っている、しっかりはしているけれども分厚くは無い掛布を被り、コウにもたれかかる。

コウは陸地で普通に過ごしているが、本当は水場に棲んでいる筈の亀だ。だから、陸亀と比べると甲羅が平べったく、もたれかかるのに丁度良い。

水に不自由する事も多い旅路は、コウにとっては辛い物だろうとカイルロッドは思っているのだが、コウ曰く、水気の少ない所でずっと過ごしていたら慣れてきたから大丈夫。との事だったので、それを聞いて以来余り水場が恋しいかについてコウに訊くのは控えている。

本当に慣れているのか、はたまた強がっているだけなのか、その判断はカイルロッドには出来ないのだが、コウの言葉を信用しない事の方がコウに対して悪いと思うので、そうしているのだ。

「ねえ、コウは僕と一緒に居るのが嫌になる事、ある？」

「うーん、もしかしたらあるかもしれないけど、思い出せないからいいや。」

ボクはカイルロッドと一緒に嬉しいよ」

「そうかあ、僕も、ずっとコウと一緒に良いなあ」

お互いぼんやりと話をしながら、少しづつろれつが回らなくなっていく。

辺りに静寂が満ちた頃には、カイルロッドもコウも、深い眠りについていた。

翌日、カイルロッドとコウは昨日と同じ場所で屋台を開いていた。街行く人が、装飾品を眺めて購入したり、偶に喋るコウに驚き、珍しい亀だと言ってコウの頭を撫でていたりして居る。

少し人並みが途切れた所で、コウがカイルロッドに訊ねた。

「そういえば、どうやってシルバーの純度とか見てるの？」

見ただけで解るの？」

その問いにカイルロッドは頭を撫でながら答える。

「意外と見た目で解っちゃったりするよ。光りかたとか、あと黒ずみの付き方も違ってくるしね。」

手に持った時の重さでも何となく解るし。

でもこれって、他の人からすれば勘って奴なのかなあ？」

「すごいなあ！カイルロッドはすごいなあ！」

嬉しそうにそうはしゃぐコウに、カイルロッドも照れたような様子を見せる。

そんなこんなで、今日もマーケットの一角に座っていたのだった。

第二章 幼少期

カイルロッドがコウに出会ったのは、まだ幼い頃の事だった。

街の中ではそこそこ裕福な商人の家に末っ子として生まれたカイルロッドは、家業を継がなくてはならない兄と比べて自由に過ごす事が出来ていた。

そんなカイルロッドがある日の事、散歩に行った先で見つけてきたのがコウだったのだ。

その頃のコウはまだ比較的小さく、カイルロッドでも抱える事の出来るくらいの大きさだった。

道端に雑草なども殆ど生えていない乾燥した街に、何故コウが居たのかは解らないが、とにかくその時コウは、お腹が空いたとずっと泣いていたのだ。

それを見て可哀想だと思ったカイルロッドが家に連れ帰ったのだが、喋る亀を見て両親は戸惑うばかり。

そんな中、祖母がこう言った。

「もしかしたらその亀さんは、神様のお使いかもしれないね。

大切にしないといけないね」

その一言で、取りあえずカイルロッドの両親は、コウに食べさせるごはんを探し始めた。

コウは青々とした草が好きらしいのだが、生憎そのような物はこの街にはあまり無い。

両親が困っていると、カイルロッドが家具を作った時に余った木片を持ってきてコウに差し出した。

「かめしゃん、あーして」

カイルロッドに言われるままに、木片を頬張るコウ。

その時にコウは、こんな堅い木でも美味しいのだと知ったのだった。

それ以来、カイルロッドとコウはいつも一緒だった。

カイルロッドが大きくなるにつれ、コウも大きくなっていく。

そして何時しか、コウはカイルロッドを乗せられる程大きくなった。

「ねえ、カイルロッド、ボクに乗ってよ！」

「乗って良いの？」

でも、僕が乗ったら重くない？」

「大丈夫！」

カイルロッドがいっぱいごはんくれたから、とっても重いのも乗せれ

るくらい元気になった!」

早く乗ってくれと期待するようなコウの顔を見て、カイルロッドはコウの背中に跨がる。

いつもと違う視界に、カイルロッドの中にも喜びが湧き上がってきた。「コウすごい!」

「ねえ、歩ける? 歩けたら歩いてみて」

「歩けるよ。歩くよ」

家の敷地の中とは言え、カイルロッドを乗せたまま歩くコウ。初めての体験に、カイルロッドもコウも大喜びだ。

ぐるぐると同じ所を何周もしている内に、ふとカイルロッドがこう言った。

「僕ね、大きくなったら旅商人になりたいんだ」

「なんで?」

「おうちのお店のお手伝いじゃダメなの?」

「うん。」

いろんな所を旅して、色々な物を見て、それでおじいちゃんになったら気に入った街でゆっくり過ごすの」

「そっかあ」

納得した様なコウの相づちの後、暫く静かになる。

何となく段々足取りが重くなっているコウに、カイルロッドが問いかけた。

「その時は、コウも一緒に来てくれる？」

その言葉に、コウは足を止め、嬉しそうにカイルロッドを見上げる。

「ボクも一緒？連れてってくれるの？」

「コウが良いなら、僕はコウと一緒に良いな」

「良いよ！」

ボクもカイルロッドと一緒に良い！

一緒に行くよ！」

夢を共有したカイルロッドとコウ。

その喜びで、コウは先ほどよりも速い速度でぐるぐると回り始める。目が回ってカイルロッドとコウがぐったりするまで、そんな時間は掛からなかった。

カイルロッドが十歳と少しになった辺りで、その日は訪れた。

カイルロッドの兄が家業を継ぎ、カイルロッドが旅商人の一団に加わる許可が、両親と旅商人の双方から出たのだ。

両親としては、カイルロッドには家に残って貰いたかったのだが、かわいい息子の夢を無為にする事は出来なかったのだ。

旅商人側としても、カイルロッドを自分達のグループに加えるメリットが有った。

そのメリットが何かというと、カイルロッドは家を継ぐ事が決まった兄と同等、若しくはそれ以上に宝石や貴金属の目利きが利くのだ。

売り子としての才はこれから伸ばすとしても、貴金属で出来た装飾品を仕入れるのにカイルロッドの様な人材は居るに超した事は無い。

それともう一つ。カイルロッドが連れていくと言い張るコウも、旅商人としては手元に置いておきたい物だった。

この様に大きな亀は珍しいし、更に喋るのだ。客寄せにはこれ以上無い程適任だろう。

かくして、カイルロッドとコウはひとまず夢を掴む事が出来たのだ。

旅商人の持っている、駱駝が引く馬車に乗っての生活は、楽な物では無かった。

旅をするというのがこんなに厳しい物なのか。カイルロッドはそう思っ

て落ち込む事もあったが、旅商人の頭は厳しいけれども優しいし、何より側にはコウが居る。

街に着く度に仕入れを経験し慣れていくうちに、きつと旅をする事自体にもその内慣れるだろうと思える様になっていった。

それから数年、既に旅をする事自体にも慣れたカイルロッドは旅の道中ではいささか頼りない物の、街で行われる様々な交渉では、その才を発揮した。

宿賃の交渉や保存食の買い付けなどはまだまだ頭に及ばないのだが、他のメンバーよりは効率的に行えたり、何よりも貴金属類だ。

貴金属類の交渉に関しては、もはや手練れの頭でさえもカイルロッドには敵わないだろう。

そんな訳なので、旅商人のグループに居る踊り子に、こんなおねだりをされる事がある。

「ねえ、カイルロッド。

さつき街の中でかわいいネックレスを見つけたんだけど、明日一緒にお店に行って交渉してくれない？」

「また？」

まあ良いけど、お代はちゃんとアリーシャが払うんだよ」

「もちろん！」

だから、払えるくらいまで値切ってね」

「いや、そこまで下がるかどうかは物を見ないと解んないよ……」

街中の屋台で食事をしながらそんな話をするカイルロッドと、踊り子のアリーシャ。

コウにもごはんを食べさせながら暫く過ごしている内に、陽はすっかり落ちてしまった。

暗くなった街中を、カイルロッドはコウに乗りながら、アリーシャは自分の足でゆつくりと進んでいく。

辿り着いたのは暫く過ぎす、この街の宿。

アリーシャは酒場で仕事があると言って宿併設の酒場へと行ってしまったので、カイルロッドはコウと一緒に厩へと向かった。

厩の中で、カイルロッドとコウは取り留めの無い話しをする。

「カイルロッド、旅にはもう慣れた？」

「いい加減慣れた気はするけど、街に着くと道中疲れてたんだなっていうのがわかるよ。」

こうしていると、疲れがどーんと来るもん。

コウは疲れないの？」

「うんとね、よくわかかんないんだけど、こうやってごろーんってしてると、とろーんってなってくるよ」

「そっかあ、それじゃあきつと、コウも疲れてるんだよ」

「疲れてるのかあ。」

カイルロッドとお揃いだね」

「そうだね。お揃いだ。」

じゃあ疲れた同士、そろそろ寝ようか」

そう言っただけカイルロッドは掛布を被る。

その後はお互い何も言葉を出さず、吸い込まれる様に眠りに落ちたのだった。

そして翌日。アリーシャが見つけたというかわいいたいネックレスの値段交渉に来た訳なのだが、カイルロッドは戸惑いを隠せない。

カイルロッドが見る限り、このネックレスはこれ以上値を落とせなさそうなのだ。

全くもって、アリーシャは無理難題を言うなと思いつつながら、申し訳

程度に値引き交渉を始めたのだった。